

動物の餌付けに関する総合的研究

A synthetic study on the animal feeding

代表研究者：堂前雅史 和光大学人間関係学部 助教授

Masashi DAUMAE, *Associate Professor, Faculty of Human Science, Wako University.*

共同研究者：石田おさむ（多摩動物公園・副園長）、菊池直樹（兵庫県立大学・講師）、香西豊子（日本学術振興会・特別研究員）、篠田真理子（恵泉女学園大・助教授）、松本文雄（釧路市教育委員会・主査）、丸山康司（産業技術総合研究所・研究員）

Coworker: Osamu ISHIDA, Naoki KIKUCHI, Toyoko KOZAI, Mariko SHINODA, Fumio MATSUMOTO, Yasushi MARUYMA.

和文アブストラクト：近年、野生動物の餌付けあるいは餌やり活動は、野生生物保護の現場では生態学的攪乱として否定されがちである。しかし人間の生活文化にとって動物への餌やりは大きな意味合いを持っている。本研究では餌付け行為について社会的文化的見地から研究した。アンケート調査では、近年になっても国内外の動物園の餌やりは人気があることが分かった。北海道のタンチョウやあるいは春日山のシカのように、餌付けによる個体群の保護が効果を上げている場合、社会的に定着してしまった場合には、餌付けを単に野生生物保護の阻害要因として排除しきれないことが考えられる。また猿害の例では、餌付けによって結びついた人間と動物の関係は、それによって生じた被害を相対化してしまうことがあり得ることが示唆される。野生生物の餌付けについて、継続か停止の判断は現場の多様な人間と野生動物の関係性に基づいてなされるべきである。

Abstract: Although feeding wild animals is often described as an ecological disturbance, it has significant societal implications for humans. Therefore, in the present study, aspects of feeding were investigated from a sociological viewpoint. We conducted a questionnaire survey, and it showed that feeding captive wild animals has become popular in zoos in Japan and other countries in recent years. When feeding has contributed to the protection of wild population or become socially established, such as with Japanese cranes in Hokkaido or Japanese deer in Nara, these activities should not be completely forbidden for the sake of wildlife conservation. In the case of Japanese macaques, our study suggests that identification of harmful interactions with wild animals might be influenced by the particular relationships between humans and the wild animals they are feeding. Hence, decisions whether to continue wildlife feeding should be made based upon the specific relationships between the wild animals and human beings in question.

1. 研究目的

かつて人が動物に餌を与えるのは、ごく当然の行為とみなされてきた。小鳥の餌台を庭に設置するのは動物の愛好家でなくても、ごく当たり前に行われてきたもので、餌付けは自然の行為とされた。しかしこれが昂じてサルやシカ、カラスに餌付けするとなるといわゆる獣害と結びつけられ、その是非が問われ、また餌付けにより動物の《野生》が侵害されるという感覚的な反発があるし、また生態系への介入・管理問

題とも関わる。しかし一方で、動物との触れ合いという動機から動物への深い関係を求める伝統的立場もあるし、また現実に野生生物保護に貢献する場合もあり得る。本研究では、餌付けという行為への評価の複雑さを踏まえ、なぜ餌付けが行われるのかについて、餌付けされる動物を人間との関係性によって分析し、これからの人間社会と野生生物との関係を考察する基礎となすことを目的とした。

2. 研究経過

まず全員で野生動物の餌付けのケースとして知られている釧路湿原のタンチョウの餌やり活動の調査を行った。日本に生息するタンチョウは明治以降減少し、一時は絶滅視されたが、大正末期に釧路湿原で十数羽が再発見された。その後、保護活動が開始され、1950年代の人工給餌の成功に伴い、個体数も増加してきたこともあり、タンチョウへの給餌（餌やり）は、現在に至るまで、有効な保護活動として位置づけられている。現在、環境省および北海道がタンチョウ保護事業として、冬季の給餌を実施し、地元の人を給餌人に委嘱して餌やりが行われている。また、この他に数十箇所でも個人的に給餌している人がいることが確認されている。タンチョウへの餌やりは好意的に取り上げられることが多いが、近年では人馴れによる被害なども起こり始め、問題を指摘する声も上がってきている。そこで我々は北海道におけるタンチョウの餌やりに対する意識を明らかにするために調査を行った。方法としては、環境省および北海道から委嘱を受けているタンチョウ給餌人、および個人的に給餌を行っている人のうちの10人にタンチョウへの餌やりについてインタビューを行った。また、保護事業を進めている環境省および北海道の担当者にも取材した。

またヨーロッパのクワンソウの保護の現状の調査のためにドイツ、オーストリアに向かい、餌やりを伴わない保護活動の実態を調査し、日本の餌やりを伴う保護政策について考察する材料とした。

香西は古くから知られている餌付けの例として、同じく天然記念物であり神鹿としても知られる奈良春日山のニホンジカの保護と餌やりについての歴史的調査を行った。

丸山は下北半島の西南部に位置する青森県むつ市脇野沢においては、長期間にわたって「北限のサル」との共存の課題を抱えてきたニホンザルの被害と餌付けについて調査研究を行った。現在問題となっている被害問題への意識と餌付けをはじめとするサルとのかかわりとの関係から被害と被害心情の関係などを明らかにするため、下北半島の農業従事者などへの質問紙調査を実施した。またその結果を確認するため、文献調査として地方紙（東奥日報）の分析を行った。

菊池は豊岡周辺でクワンソウの記憶を聞き取る調査を行い、かつてクワンソウが地域の中で学術的価値に限定されない多面的な価値を持つ生き物であることを明らかにしてきた成果を踏まえ、人間によるコントロールの強弱と価値の軸のなかに餌付けを位置づけることにより、人間と動物との関係を整理することを試みた。

石田は、動物園という人々が動物と接する現場での餌やりの事例のアンケート調査を行い、日本と欧米の動物園での餌やり活動の調査を通じて動物の餌付けへの一般の意識について明らかにした。日本の動物園（94園）、欧米の動物園（455園）にアンケートを送付し、277園からの回答を得た。また人々が動物に餌やりを行いたくなる動機付けについてのアンケート調査を行った。

2. 研究成果

タンチョウ調査において、取材対象は北海道の給餌人として委嘱を受け、30年以上、給餌を行っている人から、数年前から個人的に始めた人まで、その経緯や携わってきた歴史が多岐にわたるため、給餌に対する意識も様々であった。タンチョウに対する愛おしさは、全ての餌やりをしている人の共通認識としてあったが、本来は自然に反すると思いつながら保護のために行ってきたという人、特にそのような意識はないが、ツルが来るからあげているという人、より近くにツルを呼び寄せたいと思う人など様々であった。餌をやることへの弊害を認識している人はあまりいなかった。近年になって餌やりを始めた人の中には、タンチョウをなつかせることを目的としているような場合もあった。行政側は、餌やりはタンチョウの保護のために効果があったが、個体密度の増加、タンチョウの人馴れなどの問題があり、見直しを考えているということであった。ただし、個人の善意によるボランティアによって行われてきたため、行政側で機械的に給餌の中止などの整理はできない側面があり、現在、給餌のルール作りを策定中であるということであった。

かつてタンチョウが絶滅危惧種であり、種の保護のための餌やりは推奨されていた。上記のように個人的動機から行われることが多いが、タンチョウの場合、種の保護というお墨付きが国や世間から与えられたため、餌をやることの

弊害を省みることがあまりなされなかったと思われる。保護のためという強い動機付けによって始まった餌やりが、長年の間に餌やりへの意識の多様化を生み出したと思われる。

奈良春日山のニホンジカについては、興福寺の勢力の盛んだった戦国末期には、神鹿殺しは重罪とされたが、近世になると人に危害を与えかねない牡鹿の角が伐られるようになり、春日野周辺八ヶ村は農作物への被害が考慮され租税が免除されるなど、信仰と獣害対策が行われてきた伝統が伺われる。近代では1871年には県令が害をなす鹿の銃殺を許可するものの、その後保護策に転じ、1878年には「神鹿殺傷禁止区域」が制定された。餌付けとしては、近世から売られていた「シカせんべい」に1912年から証紙を添付され、1918年「シカせんべい」が神鹿保護会の直営専売制とされて保護と一体化した。奈良のシカにおいては、時代のさまざまな要請のなかで、鹿の意味づけが、神鹿からシカ（天然記念物）へと変容してゆくさまが見てとれる。その結果、鹿は、食性・疾病・死因・個体群構造等の変化について、保護の観点から厚い配慮をうける一方で、「鹿害」の張本人に仕立て上げられもするようになったのである。「奈良のシカ」の要点は、シカそのものではなく、「奈良の」という点にあると思われる。つまり、天然記念物として指定をうけ、保護・保全を促進されているのは、シカをとりまく「環境」なのである。そして、その「環境」のなかに、餌付けを含んだ人間とシカの関係も含みこまれていることには、十分に留意しなければならない。

下北半島におけるニホンザルの餌付けについては、現在問題となっている被害問題への意識と人間とサルとのかかわりとの関係を明らかにした。サルの被害を受けている農業者の間では否定的な意見が多くなっている一方で、サルとのかかわりが長い地域においては相対的に捕獲制限に対する理解もあり、餌づけも含む歴史性が反映されていると考えられる。つまり、被害と被害心情、あるいは被害心情と排斥心情とは必ずしも一対一で対応していない。被害や排除といった心情に影響している要因としては、むしろ社会システムに起因するものが多いと考えられる。

サルの生態への影響を考えた場合、餌づけという行為そのものは肯定できないであろうが、

調査結果からは、餌付けは動物への心情の近さに影響していると考えられ、このことが被害を与えるサルをある程度容認する態度と結びついている可能性がある。逆に、専ら「害獣」としてサルと接触している場合には、被害や排除が強く表明される。こうした点を考慮した場合、動物との日常的な関係を構築する方法についての考察が必要である。

コウノトリについては、一般に学術的価値から論じられることの多い保護と野生復帰のプロセスにおける餌付けを検討された。2005年9月、豊岡市で飼育下のコウノトリが自然放鳥された。これはコウノトリへのコントロールを徐々に弱め、自立した個体群の創出を目的とする取り組みである。だが里の鳥であるコウノトリの生息域は人間の生活域とクロスオーバーし、必然的にさまざまなかかわりが生じる。学術的価値のみならず、文化的価値、生活的価値を再び創出し、コウノトリの多様な意味が復活し、個々では矛盾する可能性を持つ諸価値の間のバランスを保つ文化を創出する。野生復帰は、コウノトリの多様な価値を創出し、地域文化を創造するプロセスとして捉えなおされる。この場合、餌付けは野生復帰のプロセスにおける1ステージとして位置づけられるだろう。

動物園の餌やりについては次のような結果が出た。実施の有無としては、日本では実施59.6%、未実施31.5%、停止5.4%、欧米では実施47.6%、未実施47.0%、停止4.3%であった。日本では経営による差が大きく、公立40.8%、公設民営64.7%、民営95.7%と民営動物園ほど餌やりを行っていた。欧米各地域では、東欧84.2%、アメリカ66.0%、中欧63.3%、オセアニア45.5%、南欧31.8%、イギリス27.0%、北欧10.5%であった。

実施している園の開始時期を調べたところ、日本では、1986-90年が一番多く、20.0%であるが、その他の年代もほとんど変わらず平均的ではほぼ10-20%で推移している。欧米では2000年以後に開始している園が32.6%で、1995年以後とすると48.3%にのぼり、餌やり行動が最近になって容認されていると考えられる。対象となっている動物種は家畜、家禽が多い。しかし日本では、83.3%の動物園で野生動物にも実施しているのに比べ、欧米では51.1%が家畜・家禽に限定している。趣旨・理由については、日欧による違いがほとんどなく、「来園者の要望に応

える」が高く、「教育」、「財務」と続く。利用者の餌やりへの要望は高い。しかし野生動物に餌を与えていいのかといった懸念や管理上の困難性など問題は多いとされている。

また餌を与える行動の観察を通じて、その直接的動機と見られる要因を探ってみた結果を以下に列挙する。(1)動物の関心を引く：動物の注意をこちらに引きたい。精神的な一体感を得たい。(2)自分に近づけ、距離を縮小したい。(3)具体的にねだられるので、これに応えたい。関係の安定を求めたい。(4)動物が喜びうれしさを体で表現するのを見たい。(5)可哀想なので、何かしてあげたい。自分が餌をあげないといけないという思い。(6)単に食べるところを見てみたい。(7)共通の話題づくりや協働作業をしたい。(8)与えることそのものをしたい。純粋な贈与。(9)相手をコントロールして優位に立ちたい。不平等だからこそそのやさしい関係。

簡単に動機を見てきたが、ほとんど全ての直接的動機は、自己に物質的・精神的に還元される動機である。タンチョウへの給餌行為を行う人の動機とも重なるところが多い。日本人には「動物が喜んでいのになぜいけない」という自然な欲望をそのままでは抑えてはならないというパーソナリティがあるという説がある。このことは周辺事情への配慮の欠如へとつながっていく。

動物園の事例で見られるように、人間の生活文化にとって動物への餌やりは大きな意味合いを持っており、特に国内外の動物園では野生動物への餌やりが近年になっても人気が高いことがうかがわれ、その動機についても周辺事情から独立して自分と動物との関係性の中に絶対的価値を見出す傾向がある。タンチョウやニホンジカの例に見られるように、餌付けによって個体群の保護が効果を上げている場合、社会的に定着してしまった場合には、餌付けを単に野生動物保護の阻害要因として排除しきれない。またニホンザルの例にも見られるように、餌付けによって結びついた人間と動物の関係は、それによって生じた被害を相対化してしまうことがあり得ることが分かる。奈良のシカのように餌付けも獣害も長い歴史を持つ事例でも、その傾向は顕著であり、そもそも「餌付けしない自然な個体群」を想定すること自体が困難である。またコウノトリの例のように、通常は野生個体

を人間に依存させる方向性を批判される餌付けであるが、逆に野生化へのプロセスとして位置づけられる場合もあり、そうした文脈を無視しては餌付けの是非は議論できない。

こうしたことから野生動物の餌付けについて、継続か停止の判断は現場の多様な人間と野生動物の関係性に基づいてなされるべきであるといえよう。人間の影響を排除した空間を想定した生態学的・学術的価値からの視点のみからではなく、当該地域における人間と動物の関係性の中での文化的価値、生活的価値からの検討がなされるべきであり、コモンスとしての自然として、ゆるやかな管理のありようが模索されねばならないであろう。

今後の課題と発展

動物への餌付けの功罪は社会的文脈から独立して議論されがちであるが、単に功罪を論じるのではなく、上述したようなコモンスとしてのゆるやかな管理の有り様を模索するために、個々の事例について文化的価値・生活的価値からの検討を続ける。またそれによって、現在問題となっている特定鳥獣保護管理や野生動物管理の現場の合意形成に貢献できるスキームの提案を社会に向けて行っていきたい。

発表論文リスト

- 丸山康司(2003)「多元的自然と普遍的言説空間」『科学技術社会論研究』vol. 2, pp. 68-79.
- 菊地直樹(2005)「ヨーロッパのコウノトリ保護」『自然保護』vol. 488 : pp. 14-15.
- 丸山康司(2003)「野生動物問題は人の社会問題」『自然保護』vol. 475, p. 13.
- 菊地直樹(2006)『蘇るコウノトリ：人びとの語りにみる里の暮らし』(仮) 東京大学出版会 (印刷中)
- 松本文雄(2006)「ヨーロッパにおけるシュバシコウの保護増殖—オーストリアとドイツの取り組み」『阿寒国際ツルセンター紀要』vol. 4 (印刷中)
- 丸山康司(2006)『サルと人間の環境問題』昭和堂 (単著) .
- Yasushi Maruyama(2006) Pluralism and Universality of Environmental Discourse. *International Journal of Japanese Sociology*, vol. 15, (印刷中)